

Aliens, were they want to say to us? But it's a mystery. Has Aliens been to [the] earth?

- ⑥ Me, too. It is difficult to made figures in Nazca. This is figures which made were Aliens. It's messes from Aliens.
- ⑦ I think so. Because figures [are] very big and difficult. What on earth are Aliens writing for? I have never seen Aliens. Are Aliens speak [some] language?
- ⑧ How strange! I don't think so. It is nonsense. I haven't seen Aliens. I think that the people who made them were the person.
- ⑨ I don't think so. I think, this figures were made by old people. And they have a wing. But, それが見つからないのがmystery. (全生徒33名のうち、0語~5語の生徒が6名(18.2%)であり、6語~10語の生徒が4名(12.1%)であった。)

#### IV 考察

##### 1 生徒作品から

###### (1) 評価

評価にあたっては次のことに留意した<sup>注6</sup>

###### ① 添削は極力控える。

生徒への還元は、内容に対する評言(例えば, "Very interesting." "I think so, too." "What a good boy!" "You did a good job!" など)を中心とし、赤ペンを使った添削は極力控えた。

###### ② 内容の面白さを求めた。

コミュニケーションの性格上、読み手を大切に、自分の考えを積極的に伝えようとする態度を養うた

注6 Hatori (1990), Kepner (1991)などは、言語面の誤りを添削して生徒にフィードバックしたケースと内容へのコメントを生徒に与えたケースでは、その後のライティング能力の向上の差が見られないことと、場合によっては、むしろネガティブな影響を与えるという研究報告をしている。

めに言語面の正確さよりも内容面の面白さを重視した。<sup>注7</sup>

###### ③ 分量の多さを歓迎した。

1語、1文での反応も積極的、好意的に評価した上で、まとまりのある、しかも論の展開がしっかりしている文章を高く評価した。

上に挙げた生徒の解答例には、be動詞と一般動詞の混同(②⑤⑦)、時制(②⑦⑨)、数(①⑨)、日本語からの影響と思われるもの(③④⑦)、その他スペリングの間違いなど様々な興味深い誤りが含まれるが、何を言おうとしているのかは着実に伝わって来る。その後の、教師と生徒、生徒同士のインタラクションに発展しそうなユニークな発想がいっぱいである。

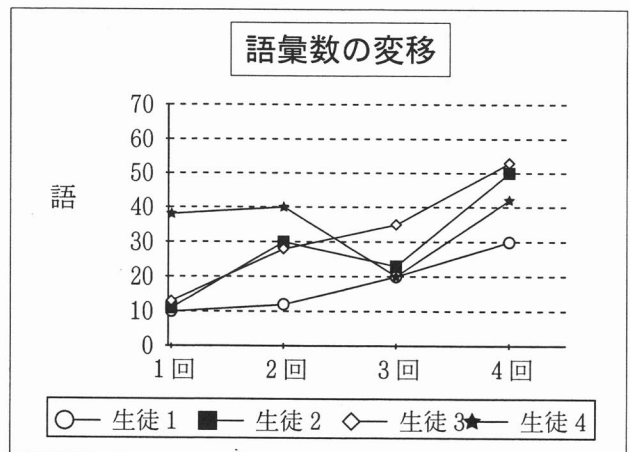
##### (2) 生徒が使用した語い数

4回に渡って行ったこの活動において、生徒が使用した語い数をまとめると次のようになる。

	第1回	第2回	第3回	第4回
総語い数	542	535	487	1016
平均語い数	16.4	17.3	15.2	31.8
最も語いの多い者3名	53/39/39	67/40/36	37/37/35	92/58/56
最も語いの少ない者3名	0/0/0	2/2/5	0/1/2	4/4/11
日本語の使用箇所	18	18	11	8

※ 短縮形を使える場合は、2語で書いてあっても1語と数えた。

※ 著しい間違いにおける「不要と思われる語」及び日本語はカウントしなかった。



注7 奥村清彦「書く力のテスト」『現代英語教育』(大修館) 1992年11月号, p. 19.